

白石市文化財調査報告書第六号

鷹の巣古墳群(第十二号)緊急発掘調査報告書

白石市教育委員会

正 誤 表

		誤	正
1 2 頁	6 行	瓦葺 ^x	瓦葺 ^o
	1 1 行	瓦葺 ^x	瓦葺 ^o
1 5 頁	2 2 行	阿倍 ^x	安倍 ^o
2 4 頁	1 7 行	解放 ^x	開放 ^o
2 7 頁	1 1 行	口經 ^x	口徑 ^o
2 8 頁	2 行	口經	口徑 ^o
3 8 頁	4 行	平担 ^x	平坦 ^o
3 9 頁	1 3 行	上戸 ^x 駅	上戸 ^o 沢 駅
4 0 頁	7 行	福田 ^x	福岡 ^o
4 5 頁	4 行	戊辰 ^x	戊辰 ^o
	7 行		「瀬上の宿舎で殺害され」は
			「福島駅阿武隈川原で討たれ」と改める
4 7 頁	1 4 行	大友 ^x	大伴 ^o
5 1 頁	4 行	蘇峰 ^x	蘇峰 ^o
6 2 頁	3 行	一偶 ^x	一隅 ^o
	7 行	戦没 ^x	戦役 ^o
6 4 頁	5 行	「網右者 ^x	網の字をとる
7 5 頁	7 行	阿倍 ^x	安倍 ^o

は じ め に

白石市盆地の中心をなす鷹の巣古墳群は、開拓先駆者の墳墓地と考えられますので現状のまま保護すべきでありましたが、寿山住宅、宅地造成と宮城県職業訓練所の新設の中心地にあたり、発掘は白石市の発展のためにやむを得ないものと思われましたので、緊急に発掘調査を行ないました。

このたびその調査報告書がまとまり、発刊のはこびとなりました。

この報告書は、白石市の郷土史はもちろん、東北地方の上代史を究明するうえでも、重要な参考資料になると思いますから、ご活用くだされば幸に存じます。

最後にこの発掘調査のためにご尽力いただいた東北大学文学部長伊東信雄先生をはじめ、同大考古学研究室、白石高等学校、白石工業高等学校の郷土史研究班諸君並びに調査協力者各位に対し、深く感謝の意を表します。

昭和四十二年三月

白石市教育委員会教育長 小 沢 五 郎

鷹の巣古墳群

一、所在地 白石市鷹の巣本木山三八

二、調査期日 第一次 自昭和四十年四月五日 至昭和四十年四月八日

第二次 自昭和四十年十月二十一日 至昭和四十年十月二十六日

三、調査者 宮城県教育委員会、白石市教育委員会

四、調査担当者 宮城県文化財専門委員 東北大学教授 伊東信雄

東北大学文学部考古学研究室

伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
信	信	信	信	信	信	信	信	信	信	信	信
雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄

五、調査概要

宮城県南部・白石市にある鷹の巣古墳群については、古くから伝承があり、明治の頃より遺物目あての盗掘も行なわれていたらしく、「古墳塚」として知られていた。この古墳群が広く一般に知られるようになったのは、昭和五年六月に数基の古墳が遺物を目的として発掘されたことに端を発し、新聞等に宣伝されたためであった。当時の状況ならびに発掘された古墳などについては、片倉信光氏の調査報告(一)があつて、学界にも紹介されている。この折の片倉氏の報告は、鷹の巣古墳群に関する最初の信頼できる報告であつた。同氏は、この後昭和十六年にはそ

の後の調査成果を含めて、白石市郷土研究会より「宮城県刈田郡白石町鷹ノ巣古墳群調査報告書」を刊行され、これによつて鷹の巣古墳群の全容がほぼ知られるようになった。もちろん、その間に鳥井龍蔵、後藤守一などの諸学者の来訪踏査があつたが、特に本古墳群について書かれたものはなく、引用される場合でも殆んどは片倉氏の報告に依拠するものであり、今日でもその点に変わりがない程である。すなわち、片倉氏の調査報告が、本古墳群に関する最も基本的な文献になつてゐるということができる。

この片倉氏の報告によつてこれまでの調査成果を見ると、鷹の巣古墳群には所在の明らかなもの三十九基があり、瓶ヶ盛古墳（第一二号墳）などの前方後円墳三基を含む円墳を主体とする古墳群である。その中十七基ほどが発掘されており、それらの古墳の構造、出土遺物の特徴から見ると、大部分のものは古墳時代後期のものといえる。

この古墳群は、その後およそ半数を白石町寿山風致地区内に含めて、保存がはかられた。しかし、その後二十数年を経た現在では、耕作地に所在するもので破壊を免れがたかつたものもあるらしく、片倉氏の図に見えながら既に跡かたのないものもある。ともあれ、現在でもなお古墳群中の主要なものは山林や畑地にその姿をとどめ、破壊を免れていることは幸である。

このたび、この古墳群の所在する鷹の巣丘陵西部一帯の地が住宅などの建設工事に伴つて削平されることになり、古墳の幾つかも破壊湮滅を余儀なくされることになつた。即ち、古墳群中最も西端に位置する第1号墳は宮城県住宅協会の寿山団地造成工事によつて、又第一三号墳は宮城県立白石職業訓練所の敷地削平工事によつて共に破壊されることになつた。そこで、これらの古墳が破壊される前に調査を行なう必要が感ぜられ、第一号墳は地元白石市教育委員会が主体となつて第一次調査を行ない。更に第一三号墳は宮城県教育委員会と白石市教育委員会が主体となつて第二次調査として事前調査を行なつた。

調査は、第一次が昭和四十年四月五日―八日の四日間にあたり、第二次が同年十月二十一日―二十六日の六日間にわたつて行なわれた。調査の範囲は、破壊が前提とされているので極力徹底して行なうこととなり、両古墳共に周堀を含めた全体を発掘し、古墳の具体的な姿を明らかにするに努め、後述するよりの成果を得た。

なお、調査に際しては白石市教育委員会教育長柴田勝郎氏、同社会教育主事太斉享氏、同文化財保護委員方々を始め各位の適切な御尽力を頂き、調査をスムーズに行なうことができた。宮城県教育庁社会教育課文化財係長佐藤好晃氏には、調査の企画推進にいつもながらの御尽力を頂き、特に第二次調査にはお骨折をいただいた。又、宮城県住宅協会においては、今野理事をはじめとして遺跡の事前調査に理解ある態度を示され、感謝に堪えない。地

元の菊地忠四郎氏には兩次の調査にわたつて、また第二次調査には片倉信光氏の少なからざる御援助を得たことも記さねばならない。更に、白石高校郷土研究部、白石工業高校郷土クラブの諸君には参加協力して頂いた。記して感謝致す次第である。

一、位置および地形

鷹の巣古墳群は、宮城県白石市鷹の巣にあり、古墳群自体は鷹の巣丘陵の尾根上に数群の小グループに分れて存在するものである。我々の調査した古墳の中、第一号墳はこの西部に位置するグループの一基で、片倉氏が第Ⅰ群としたものの最も西端に属する古墳である(第1図)。第一三号墳は、その丘陵上の東方約四〇〇メートルに位置し、片倉氏が第Ⅱ群としたグループに属している。この第一三号墳の東北方四〇メートルの地点には、本古墳群中の主墳と目される第一二号前方後円墳(瓶ヶ盛古墳)がある。

古墳群の存在する鷹の巣丘陵は、東北本線白石駅の東方に突出している丘陵で、その西端は北流する齊川を隔てて白石市街を望んでいる。この丘陵は、白石盆地を囲む山並の中、東方から延びてくる丘陵の一支脈であり、盆地に向つて延びている最も大きな舌状丘陵である(第1図)丘陵は、多少の屈曲を有しながら幅五・六〇〇メートル、長さ二キロメートルにわたつて西方へ延びており、古墳はこの尾根の稜線に沿つて点在している。(図版一(1))。最も高い部分は標高一〇〇メートル前後である。

この鷹の巣丘陵の西南には、径約三キロメートルの白石盆地が望まれ(図版一(2))、兩者間の比高は五〇メートル前後である。白石盆地は、ほぼその中央を齊川が北へ向つて貫流している。齊川は、市街の北方約二キロメートルの地点で西から北へ向つてカーブして流れる白石川に合流している。(第1図)。この盆地は、古くは齊川の兩岸に形成された湿地帯であつたらしいが、古墳時代頃には次第に人間の進出が可能となつたらしく、齊川の河川改修工事等に伴つてこの平地から多数の土師器などが発見されている。この盆地を隔てて西方には、遠く南蔵王連峯も望見でき(図版二(1))、古墳群の位置するところは極めて眺望のすぐれたところである。

この鷹の巣古墳群の存在する白石盆地附近には、この古墳群以外にも北方一・五キロメートルの地点に郡山横穴古墳群があり、更にその東方山地内にも数基の横穴古墳があるといわれ、西南の盆地方面にも二・三の古墳が存在している。又、集落遺跡と思われる土師器および須恵器出土地も、盆地の周辺はもちろん盆地内にさえも最近統々知られるようになってきており、これら古墳群营造の背景が集落との関連において考えることが具体的に可能となつてきている。鷹の巣古墳群もまた、この下方の盆地に集落を営んだ人々と密接に関連するものであつたことは容易

に推測されることである。

二、第一号墳

(1) 遺跡

第一号墳は、前述したように鷹の巣古墳群中で最も西端に位置し、寿山地区に属している。調査当初の測定では直径一五メートル前後の円墳と見られた。高さは西側墳丘裾を基準とすれば約二メートルであつた(第3図)。外形の観察では、墳丘の裾がかなり削りとられていて、やや不整の円形を示し、直径に比して高さの低い墳丘で、非常に平坦な古墳のように感ぜられた。(図版三(1))。この古墳は、既に片倉氏も疑念をいだかれたように(2)、平面形の上ではあるいは方墳ではないかという懸念もあつたが、発掘の結果は円墳であつた。墳丘の上は、調査時には枯草と茨がおおつてあり、周囲は畑として耕されていた。唯、墳丘西南部は未墾の境界とつらなり、茨や笹・茅におおわれ、間もなく高さ一メートルほどの低い崖となつていて、区別が明らかではない。墳丘の東・西では、丘麓から五・六メートル幅の僅かなくほみが墳丘をめぐつてゐることが観察され、くぼんでいる部分は黒土が著しかつた。このくぼみがめぐつてゐることは既に片倉氏の実測図にも見えており、この古墳には周堀があることが予測され、周堀調査が有望視された。特にこの古墳では、北西方向に五度前後で傾斜する斜面上に営なまれ、斜面の上方と下方を区切つて作られたために、その部分の周堀が顕著な形跡を止めることになつたと見られた。

調査は、まず墳丘上に尾根の方向に沿つて幅三メートルのトレンチを設け、後にこのトレンチを墳丘外にも延長して周堀の探索をした(図版三(2)、第4図)。墳丘中央部では、内部構造の追求と墳丘築成状況を観察するためにトレンチを墳頂下約一・五メートルまで深めた。又、周堀を追求したトレンチは、幅三・五メートルで周堀に沿つて掘り進め、西南部を除く全形を明らかにした。トレンチは、この外にも墳頂で若干の補足調査を行なうために設定され、発掘の全面積は二五〇平方メートルに及んだ。

調査の結果は、第一号墳は直径約一七メートル、現高約二メートルの円墳であり、その外周に二・三メートル幅の周堀をめぐらすものであることがわかつた。(第4図)。

この古墳の内部構造と思われるものは、墳丘中央部表土下に径五一一〇センチメートルほどの礫が群在している個所が発見されたのみであつた。礫群(図版四(1)、第4・5図)は長軸をN二〇度Wの方位とする長方形の分布を示し、長辺約二・三メートル、短辺約八〇センチメ

ートルをはかつた。この礫は、表土直下約二〇センチメートル前後に発見されたものであるが、墳丘積土である黄褐色粘土層にのつており、内部構造の一部と考えられた。特に、他に墳丘上では何らの遺構も発見することができなかったが、この礫群が古墳中央部を占めていることは、これを内部構造の遺構と見ることを可能にしている。ただ、この礫以外には何も見出されていないので、より以上具体的に内部構造を明らかにすることはできなかった。恐らく、墳丘の形状が不自然に低いことからみても、比較的早い頃にこの古墳の墳丘は削り取られてしまい、内部構造もまたその底面の礫を残す程度までそこなわれてしまつたものであろうと判断される。このような礫群の遺存状態であつたので、この礫群がどのような内部構造の一部をなすものであるかを具体的に知ることは困難である。礫を底面に敷く内部構造は古墳によく見られるところであるが、礫礫の如きものを想定するには礫が少な過ぎるかと思われる。その点では、石室底面の礫敷か、簡単に木棺を置くための礫敷のみの遺構が考えられるが、にわかに決定することはできない。いずれにしろ、礫を底面に敷くのを特徴とする内部構造であつたことは確実である。

この古墳では、外部施設としては周堀が認められたのみであり、埴輪や葺石は存在しなかつた。周堀は、西南部の一部を除く約四分の三を發掘した。堀は、東西方向で測つた外周直径は約二二メートルであり、幅は二―三メートルで一定していない(図版四(2)、同五、第4図)。特に東側では幅広くなつていた。深さもまた必ずしも一定せず、最も深い西側では現地表下一メートル程度になる(図版五(2)、第6図)のに対し、東側では四〇センチメートルぐらいで浅かつた。底面はゆるいカーブを描くU字状を呈するが、東側では若干の凹凸があつて乱れていた。周堀の断面を典型的な西側で観察すると、基盤の黄褐色粘土層をU字状に掘り下げた後に、中央部で一〇センチメートル前後に黄褐色土層が堆積している。その上部には二〇センチメートル程の厚さに黒色土層が認められ、更にその上方に厚く暗黄褐色土層が認められ、その上を耕土がおおつている。(図版五(2)、第6図)。堆積の順序は今述べたようなものとなるが、この層序から次のようなことが読みとれよう。まず、堀が地盤を掘り込んで作られた後しばらくは地盤の土と良く似た黄褐色土が堆積している。これは、有機質によつて汚染されることが少ない層であるので、堀側壁や封土に積まれた黄褐色粘土が比較的短期間に流入してできたものと見られる。その後黒色有機土が堆積することになるが、この時期には墳丘上面も草木によつておおわれ、封土の流出等は止められ、もつぱら有機土の堆積が行なわれていたのであろう。ところが、この自然的な黒色土の堆積の上に更に暗黄褐色土層が存在している。この層は地盤の土にくらべて汚染されたものであることが明らかであり、恐らくその後墳丘が大きく削られた際の土であり、低かつた周堀部分に埋められたものであつたろうと思われる。その土質およ

び堆積状態から考えると、中間にある黒色土層の上に堆積することは不自然であり、別の営力を媒介として考えるのが妥当であると思われるからである。そして、その上が耕土化されたものであろう。堀の東側では、この西側の観察とは若干異なり、黒色土層の堆積後には斜面上方から大量の黄褐色土が流れ下つて、重なつていた。これらの周堀全体の観察からみて、この堀は墳丘の裾を劃する空堀であつたといふことができる。

墳丘の築成状況については、墳丘中央部で深掘りを行ない、又、墳丘の東西で地層変化を観察することによつて調べた。その結果、墳丘の積土は中央部で表土下一メートルまで認められた。それ以下は旧地表の黒褐色土層であり、漸次黄褐色粘土の基盤に移行している(図版六(1))。この旧地表を示す黒褐色土層の延長は墳丘側面にも観察され、墳丘の東西間で約三度の傾斜をもつている。墳丘積土はこの旧地表上に盛りあげられたわけであるが、内部構造は前述したように現表土直下に認められているから、かなり盛り土された後に営なまれたものであつたと知ることが出来る。すなわち、墳丘積土を旧地表上約七〇センチメートルほど盛つた個所で内部構造が営なまれていたわけである。それ故、発掘の結果では墳丘積土が約一メートル程確められたに過ぎないが、元来は更に高く積まれたものであつたことが明らかである。少くとも、内部構造の底面の礫が発見された個所よりは一メートル前後高くしなければ、内部構造を完全におおい得なかつたであろう。そう考えてくるとこの古墳の墳丘は約二メートルも盛り土されて作られていたものであり、もともとの高さは三メートル前後になつていたろうと推測できる。このような墳丘を築くためには、かなりの土量が必要とし、単に周堀を掘り上げた土のみでは不十分であつたと思われ、墳丘の東方斜面からも土を削り取つている形跡がある(第4図)。

遺物の出土は、墳丘東南側の裾から周堀内にかけて認められた土師器以外には発見されていない。土師器には、小型の壺・鉢・坏が認められた(図版六(2)、第7図)。出土状態(第4図参照)を述べれば、第7図1(図版六(2)の1)は東側の堀内縁の傾斜に沿つて、口縁を下にしてつぶれて出土した。同2(同2)もまた、東南部の周堀内縁においてつぶれた状態で発見された。同3(同3)は、2の東方の堀外縁近くに存在し、土ほどの破片となつて発見された。同4(同4)は、南部の周堀内縁近くから見出された底部破片である。この外、若干の破片が発見されているが、それらは周堀内の黒色土層排除中に発見された小破片であり、黒色土層中に含まれていたものと見られた。これらの土師器出土状態を見ると、すべて周堀内に転落したものと見なされ、出土層は黒色土層中を主とし、明らかにその下部の周堀底部黄褐色土層に喰ひ込んであるもの(第7図1・2)もあつた。このことは、これらの土師器の転落した時期が少くとも黄褐色土層の流入とほぼ一致する頃か

ら黒色土層の堆積中にかけてであつたことを示している。すなわち、これらの土器の中黄褐色土層に喰い込んで発見されたものは、先に述べたような経過で封土の表層が周堀内に流入した頃に同時に転落したものであり、欠失も殆んどない完形品として発見された理由もそのようにして比較的早く埋没したことに基づくものと考えられる。その後、黒色土層堆積中にも若干の土師器が周堀に転入したのであるが、黒色土層中発見のものには小破片が多くなり、一次的転落と見られるものはない。これら土師器は、墳丘裾から周堀内縁に特徴的に発見されることは、転落以前におかれた位置が墳丘上か、墳丘裾ではなかつたかと思わせるふしがある。恐らく、祭器としてそれらの個所に置かれたものが、墳丘表層の流入と共に周堀に転落したものであろう。そして、そのおかれた位置は、土師器の出土範囲が墳丘東南から南部にかけての周堀である点から考えると、墳丘の南寄りの個所であつたと推定できる。その個所は、礫群の存在から知られた内部構造の南方に近いものであり、古墳築成後に祭器を並べてまつるにふさわしい位置と見ることができると、周堀内発見の土師器の多くは、その出土位置が元来の位置でなかつたけれども、この古墳と密接な関連を有するものであることが知られよう。

(2) 遺物

第一号墳の出土遺物は、前述したように墳丘の東南から南側にかけての周堀内発見の土師器のみである。器形は壺・鉢・杯で、計一〇個体分三四点を数える。砂粒の含有量が多い、赤褐色の粗雑な作りのものである。

壺

壺は、完形品は一個のみで、他は破片である。第7図1(図版六(2)1)はその完形品である。口縁部が外反することなく立つ傾向を示すが特徴であり、底部は不安定な篋削りの不整形で、多少中高である。口径九センチメートル、高さ九・二センチメートル、厚さは約五ミリである。頸部の下端にはかすかな稜が形成されているものらしいが、器面が粗雑で不鮮明である。口縁内側でも、胴部へ移行する部分でかい稜を形成している。口頸部には、横に整形されたあとが見える。

一壺の他の個体の破片は、三个体分七点である。胴部四点、底部三点である。底部二点(第七図4・6、図版六(2)4)は径四・五センチメートルの小形の底で、篋削りの極めて不安定なものである。他の一点は安定した平底の破片であつた。しかし、いずれも形状が知られる程のものではない。唯、底部から胴部へかけてのカーブから推定されるところでは、胴部は球状を呈するものであつたろうと思われる程度である。

鉢

鉢（第7図2、図版六(2)2）は一個体分七点ある。底部から口縁部にかけて半分は接合できるが、他の残りの部分はうまく接合できない。復元される口径は一〇・五センチメートル、底径五・六センチメートル、高さ七・六センチメートル、器厚は五ミリ前後であるが、底部は一・三ミリの厚さを有する。口縁部は若干内湾し、口縁外側は幅一ミリほどで軽い稜を形成している。口縁外側には幅一ミリの横の整形痕が走っている。胴部の下方は、底部との接着に際して圧されたためにできたと思われる縦長の凹凸が認められる。底部は安定した平底であり、木葉の圧痕がある。

坏

坏は五個体分一九点あり、すべて小破片である。第7図3（図版六(2)3）は口頸部が内湾気味に直立する傾向があり、以下は強いカーブを示して底部にいたっている。底部は丸底となる。推定口径は一五センチメートル、高さ五センチメートル、器厚は口縁部で三ミリ、底部では次第に厚くなつて八ミリにもなる。類似の破片が他にもう一個体分ある。

第7図5は、破片が多いけれどもうまく接合できない。口縁部は3とやや異なり、屈折が著しくない。若干外傾する口縁の下端に軽い段を有しているのが特徴である。推定口径は一五センチメートル、高さも五センチメートル前後となる。器厚は六ミリほどである。底部は丸底となる。

他に、調査トレンチの黒色土層から発見された坏破片二点があり、共に糸切底の底部であつた。出土した層も、その特徴も、この古墳と直接関連するものとは見られないものであるので、出土していることを述べるに止めておく。

三、第一三号墳

(1) 遺跡

第一三号墳は、前述した第一号墳の所在する鷹の巣古墳群の第I群の東方約四〇〇メートルの字本木山の地点にあり、片倉氏が第II群とした支群に属している。（図版一(1)、第1図）。この第II群の位置は、標高約一〇〇メートルで、最も高い部分には本古墳群の主墳と見られる第一二号の前方後円墳が存在している。第一三号墳は、この前方後円墳の東南四〇メートルほどの地点の山腹斜面に築かれた円墳である（図

版二(2)・七)。調査前の所見では直径一五メートル位、高さ三メートル前後の墳丘と見られ、先に調査した第一号墳と同程度の規模の古墳と観察された(第8図)。墳丘上には松と雑木がしげつていたので、以前の予察の折にはわからなかつたが、木を伐採した後の墳丘には数個所に戦時中の松根油採取の為の松の根を掘り取つた穴が認められた。墳頂部は若干平坦に過ぎるので、盗掘されている懸念があつたが、その後墳丘中央部に盗掘坑があり、箱式石棺も盗掘されていることがわかつた。この第一三号墳でも、既に片倉氏の図にも示されているように周堀の形跡が認められ、特に墳丘北東部では著しかつた。この古墳でも、五一一〇度前後で南西方向に傾斜する斜面上に営まれていたために、北東の斜面上方は大きく削つて区切られている。

調査は、既にブルドーザーの活動を二、三日後に控えた緊急事態において行なうことになつたけれども、完全に破壊湮滅することを考えて、第一号墳と同様極力全容を明らかにすることに努めた。まず、墳丘中央を通り、南北の周堀を越えるトレンチ(図版八(1))を設けて内部施設をもとめ、更に周堀を追つて墳丘裾をめぐつた(第9図)。その後、ブルドーザーが来たので、立会つた上で墳丘の除去を行ない、墳丘中央の内部主体を調査した。発掘の範囲は約四〇〇平方メートルに及んでいる。我々の調査終了と同時に第一三号墳は完全に湮滅してしまつた。

第一三号墳は、調査の結果、直径一六メートル、高さ約三メートルの円墳であり、その周囲に一・五メートル前後の幅の周堀をめぐらすものであると知られた(第九図)。

この古墳の内部構造は二つあつた。一つは墳頂やや北寄りに浅く発見された箱式石棺であり、他は墳丘中央下で見出された木棺直葬と考えられる遺構である。

箱式石棺は、墳丘中央より約二メートル北寄りに発見され、現地表下約二〇センチメートルで蓋石があらわれた。すなわち、表土直下に蓋石が見出されたのであり、出土位置は浅かつた(図版九(1)、第9図)。蓋石は、石棺の中央部では失なわれ、東西の短辺側石の上部をおおう数枚が認められたに過ぎず、盗掘されていることが明らかであつた。しかも、残されていた蓋石も原位置を保つものと見られるものは、西端の一枚と東端の三枚位であつた。ここから取り払われた蓋石は、箱式石棺の南二メートルの地点に堀り込まれた盗掘坑があつて、その深さ五〇センチメートルほどの坑の中にほりこまれていた(図版八(2))。これらの板石は、既にうち割られていたけれども、もともとは一〇数枚程度で蓋石を構成していたものと推定される。

石棺は、板石⁽³⁾を組合せて作つた箱式石棺で(図版九・同一〇(1)、第一〇図)、長さ一八〇センチメートル、幅は西端三五センチメートル、

東端四〇センチメートルで、東の方が幅広になつている。東が幅が広いから、頭位は東であつたのであろう。深さは三〇センチメートル前後であり、方位はN六五度Wであつた。石棺の身は、約三〇枚の板石を縦長に埋めて側石としており、北側の長辺は平つぎに配し、板石間の継ぎ目にはやや小型の石を外側からあてていて、二重に板石を立てている。長辺南側は、板石を重ねつぎにして並べており、列の西の石が内側になるように配されている。南側でも、北側と同様に継ぎ目の外側に板石がさえられていて、二重に並べ立ててある。短辺側石の西側の石は板状に剝離して二枚となつた板石を両長辺の内側に立てている。東側の短辺は大きな板石を両長辺の外側に配している。この石棺には底石はなかつた。石室底部には、豆粒大以下の小砂利が少量認められたが、攪乱されていたので状態は明らかでなかつた。蓋石は、西端の一枚が棺身に密着しており、東端のものは板石の一部を重ねつぎにして並べてあつた。

以上のような石棺における板石の並べ方から見て、石棺組立ての過程を考えると次のようになる。まず、長辺北側を作り、次に西側の短辺の石を置き、次いで南側の長辺の板石を西から東に並べ立て、最後に短辺東側の石を立てた。蓋石は、西端から東へ向つて順次重ねつぎにして並べたと見られる。

この石棺内からは、出土遺物として鉄鏃が一点発見されたのみである。石棺内の攪乱土中から見出されたもので、細根式のもので、腸袂付片刃箭式鉄鏃の鏃身である（図版一二(2)左端上、第一四図一）。

第二の内部構造は、この古墳の墳丘中央に位置する木棺直葬の跡であり、第一三号墳の主体である（図版一〇(2)、第一一図）。深さ墳頂下約一・四メートルに底面を有し、その底面から鉄直刃、鉄鏃を出土し、方位はほぼN五五度Wである。この内部主体に到達するまでの墳丘積土には特に変化のない黄褐色土であつたが、遺物出土面では幅四〇センチメートルの多少白色を帯びた粘土質の黄褐色土層があり、遺物の出土範囲よりも長く東西に延び、長さ三メートルほどまで推知できた。唯、極めて不鮮明な土層ではあり、特に顕著な粘土被覆層ではなかつたので、確実な範囲はとらえがたかつた。このように、遺物のみが発見されていて、多少粘土質の土層が存在すると見られる内部構造は、腐朽の早い木棺を納置していたものであつたと考えられる。第一三号墳も、腐朽し去つて痕跡が明らかではないが、同様の木棺を納めたものであつたと理解される。そして、特に顕著な粘土被覆が認めがたいので、木棺を殆んど直接墳丘中に埋めたものであつたと考えられる。

この内部主体での遺物出土状況を見ると、墳丘の中央部に近く鉄直刃が把部を置き、その刀身は北西方向を指しておかれていた。すなわち、刀は把部を東の方としておかれていた。その切先の部分から長さ一メートル、幅四〇センチメートル程の範囲に鉄鏃が散乱していた。鉄鏃の

身部は多く西方を指していた。もともとは一括して西方を向けて置かれたものであろうが、何らかの理由で散乱状態となつたものであろう。他に、この主体部に到達する直前、地表下約一・三メートルの地点で鉄鍬の筧被断片一点が発見されている(図版一二(2)左端上より二つ目、第一四図2)。恰も、直刀の把部延長上一・五メートルの地点でもあり、底面よりも一〇センチメートルほど高いので、木棺被覆土の上に置かれたものであると考えられる。木棺が埋置された後にも若干の遺物が直上に置かれたことがこれで知られるのであるが、他には発見されたものはなかつた。

墳丘は、中央部では一・五メートルほどの積土を行なつて営なまれたものであつた。この部分では、内部主体の下方約一〇―二〇センチメートルの部分に旧地表の腐植土層(炭化粒が含まれていた)があり、この腐植土層上面の傾斜は約一〇度を計つた(第9図断面図)。墳丘積土の状態は判別が難しく、築成状況などを具体的に知ることはできなかった。しかし、この第一三号墳がつくられた際に最初に営なまれた内部主体は、墳丘中央の本棺直葬の遺構であつた。その後、中央から北寄りの墳頂近くに箱式石棺が営なまれたのである。箱式石棺は、中央部をはずれた個所に置かれており、同一墳丘における二次的な追葬である。

外部施設としては、第一号墳同様周堀が認められたのみであつた。周堀の外径は、南北二二メートル、東西推定一九メートルである(図版一一、第9図)。南北の外径が大きいのは、この方向が傾斜の方向と一致して、墳丘上方の斜面が大きく削られているためである。幅も墳丘の北側では最大四メートルに及んでいるが、他の部分では一・五メートル前後である。断面は極めて浅いV字形を示し(第一二図)、地の黄褐色土層を基盤とした上に黒色土層を七―八センチメートル、その上に一五センチメートル前後の表土層がある。表面観察でも周堀の存在は容易に知られるものであつたが、意外に小規模なものであつた。深さも二〇―四〇センチメートルである。

この周堀調査中に、埴輪・土師器・須恵器・寛永通宝などが発見された。すべて黒色土層から表土にかけてのものであり、しかも小破片となつたものが多かつた。その中埴輪は、最大の破片でも一辺一五センチメートル程度のものであり、二個体分と見られる。この埴輪は細かい破片であり、出土状態も広範囲に及んでいて、もともとこの古墳におかれものと見ることはできない。恐らく、埴輪をめぐらしている斜面上方の第一二号墳のものが何らかの理由でここまでもたらされたものであろう。

(2) 遺物

第一三号墳の出土遺物としては、左のようなものがある。

主体木棺内

鉄直刀

一口

鉄鏃

二五本分(三四点)

同木棺外

鉄鏃

一本

箱式石棺内

鉄鏃

一本

周堀内

埴輪破片

三一点

土師器破片

六点

須恵器破片

四点

銭貨

四点

鉄直刀(図版一二(1)、第一三図)は、現存の長さ九九・五センチメートル。茎部端と刀身先端を欠いている。既に、発見時において折れており、先端近くの一部は位置を転じているという状態であつた為、見出せなかつた。復元される長さでは、全長一・一メートルに及ぶ大刀であつたと見られる。把部現存長一五センチメートル、幅二・五センチメートル、茎には把木の遺残が僅かに鏽着しているのが認められる。目釘孔は、鏽がひどくて見出せない。把縁には、幅一・四センチメートル前後の装具が附されていたことが知られるが鏽びいて材質が明らかでない。多孔質のものであるから、あるいは鹿角の如きものでもあろうか。判然としなかつた。刀身は、現存部長さ八四・五センチメートル、関に近い部分の幅四センチメートル、刃先近くでは三・五センチメートルを計る。背幅約八ミリである。刃部には鞘木の遺残が鏽着している。鞘木が認められるところから、鞘に入れられて副葬されていたことがわかる。

鉄鏃(図版一二(2)、第十四図)は、木棺内外のものと箱式石棺内発見のものとは同一の形式であり、すべて、細根腸挟片刃箭式鉄鏃である。最もよく原形の知られるものから全形を復元すると第一五図のようになる。出土品の最長のものは一八・五センチメートルであるが、復元全

長は約二〇センチメートルに達するものとなろう。鍔身は、二・五―三センチメートルの長さの大部分であるが、中には二センチメートルの短いものもある。幅は七ミリ前後、背幅約三ミリ、脇幅は長さ三―四ミリで、僅かに外反する程度である。篋被は長さ九センチ前後、幅五ミリ、厚さ四ミリを内外する断面長方形である。篋に挿入される茎部は、七センチメートルの長さが中心らしい。現存するものでは完全なものがないが、五―七・五センチメートルまでは知られる。茎部は、篋被との境に関を作つて一段低くなり次第に先端に向つて細くなつていく。茎部の断面は方形であるが、末端近くでは円形となるものもあるようである。篋被の関部の部分は、特に突帯を作らず、若干幅を増しているのみであつた。

茎部は篋の一部が錆着していて、篋の装着状況が知られるものがある。茎部を詳細に観察すると、次のような順序であつたことがわかる。①茎に細い糸を斜めに巻きつける。糸は、関から末端に巻いた時には、更に末端から関部に向つて巻きながら戻つている。茎に錆着した糸は、それ故斜交している。②その上に篋を装着する。篋は、多孔質で、縦に多数の繊維の条が走つているので竹である。③関部近くを篋の上から一重巻きに糸で巻き緊縛したらしい。④樹皮（樺？）で関部より斜めに巻いていく。特に関部近くでは三・四重に重ね巻きしている場合もある。⑤樹皮巻の上に薄い黒色被膜が見られるものがあるので、恐らく漆で固めて仕上げたものであろう。篋の直径は九ミリ前後であつた。植輪破片は、最大一辺一五センチメートルであり、小破片である。大部分が円筒部の破片であるが、中の六点は表裏に幅一ミリの細かい刷毛目を有するもので、強く外反する口縁近い破片である。あるいは朝顔形植輪の破片かも知れないが、小破片であるのでよくわからない。厚さは一・五センチメートル前後である。

土師器もすべて小破片であり、形状を知りたい。坏と壺四個体分と見られるが、その中环の口縁破片は第一六図の如く復元できる。他は全く不明である。第一六図の坏は、推定口径一四センチメートル、高さは四センチメートルにみえないものであろう。口縁部がかなり外に開くものようである。

須恵器は四点出土している。表に条線叩き目を有するが、裏は無文である。裏に無文の型の跡を止めるものもある。中位の甕の破片である。

錢貨としては、寛永通宝三枚、一錢銅貨一枚がある。寛永通宝の一枚は鉄錢である。一錢は大正一二年に作られたものであつた。

四、考 察

以上、第一号ならびに第一三号両墳の調査成果について述べてきた。両古墳は、破壊や盗掘のためにもとの状態を完全に知ることはできなかつたが、知られた範囲では規模・性格共に相似た古墳と見ることができよう。ここでは、調査の結果にもとづいて両墳の年代を考え、古墳群において占める位置を述べることにした。

(1) 古墳の年代

鷹の巣古墳群において、我々の調査した第一号・第一三号の両墳は予想より古い年代が考えられるものであつた。これまで知られてきた古墳群は、横穴式石室を内部構造とする典型的な後期古墳のあつまりであつたので、この調査結果は予期しないところであつた。

まず、両墳の規模を考えると、共に直径一六・七メートル、高さ約三メートル程の円墳である。外部施設としては周堀を有している。このような古墳は、規模の小さな後期の古墳などによく認められるところであり、それ自体から見るとときにはさして年代のさかのほるものとは考えられないものといえる。この程度の古墳は、かなり古墳营造の風習が広範に行きわたるような段階になつてからのものであろう。

このような古墳の内部構造は、第一三号墳で明らかになつたところでは直葬された木棺を主体とし、墳丘に追葬された箱式石棺も認められた。第一号墳では礎敷のみであつたので具体的に明らかではないが、第一三号墳から考えて、あるいは、箱式石棺か、木棺を納置したものであつたかも知れない。第一三号墳においては墳頂に箱式石棺が認められていて、追葬されたことが明らかであつた。従つて、直葬された木棺の方が箱式石棺よりも相対的には古いといえる。少くとも、第一三号墳の場合にはその事実は動かせないものであつた。

箱式石棺が追葬されている古墳は、本古墳群の東南約一八キロメートルの地点にある伊具郡丸森町金山台町古墳群にも認められる。⁽⁴⁾

台町古墳群は、二〇〇基近い古墳が台町丘陵に群集して存在しており、典型的な群集墳といえるものである。この古墳群には、これまでにかなりの数の箱式石棺が知られており、その中には屢々墳丘中央からはずれた位置などに営なまれたものがあり、本来的な埋葬位置とは考えにくいものがある。恐らく、このような埋葬位置をとる箱式石棺は二次的な追葬によつてその位置を占めることになつたものであろう。もちろん、墳丘中央に位置し、その古墳の主体をなす箱式石棺のあることはいうまでもない。唯、台町古墳群においても墳丘全体が調査されていない場合があるので、箱式石棺が追葬かも知れないと思われる例にあつても、当初の主体が明らかでないものがある。けれども、今考えられることは、箱式石棺が屢々追葬されているという事実にもとづいてみれば、この地域で箱式石棺が採用されて一般化した時期は群集墳の発生よ

り若干遅れるものであろうということである。箱式石棺の後には横穴式石室が存在する。横穴式石室が全国的に一般化するのには六世紀の初め頃と見られているが、東北地方でもそれほど遅れることなく横穴式石室が採用されはじめたのではないかと思う。(6) 唯、具体的にそれがどの時点になるかは正確にはわからない。ともあれ、六世紀の前半にはこの地域でも横穴式石室が採用されたと見れば、それ以前に箱式石棺が盛行する年代を考えることができよう。

かくして、箱式石棺が盛んに用いられていた時期は群集墳の発生以後横穴式石室が採用される頃までの間、即ち五世紀後半から六世紀前半の時期頃に相当するものと考えることができる。

このような古墳の内部構造から考えられる年代観を、次に遺物の面から考えてみよう。遺物としては、第一号墳からは周堀出土の土師器があるし、第一三号墳からは直刀と鉄鍔がある。その中、さしあたり年代考定の資料となり得る遺物は鉄鍔と土師器であろう。

鉄鍔は、既に述べてきたように第一三号墳の直葬木棺と箱式石棺から発見されており、共に細根腸袂片刃箭式のものであつた。細根式は五世紀後半に出現してくる鉄鍔であり、その後は正倉院の矢に認められる如く後までも続く型式である。細根で片刃箭式の鉄鍔は、極めて鋭利性に富んだもので、古墳時代後期に数多く発見されるものであるが、それに腸袂が附されたものは余り多く知られていないようである。(7) その意味では、腸袂を特徴として類例を求め、その伴出遺物等から年代を考えることも可能であろうが、類例の少ない現在では難しい。しかし、細根腹袂片刃箭式の鉄鍔が五世紀後半以降のものであり、古墳後期の時期に多いということは明らかである。

土師器は、第一号墳の周堀から比較的良好なものが出土した。これらの土師器は、若干の小破片を除いてほぼ同一型式に所属するものと考えてよさそうであり、坏の形態、壺・鉢・坏の口縁部の特徴から考えて氏家和典氏の土師器編(8)年の第四型式に相当せしめて良いものと思う。

氏家氏の第四型式と呼んだものは、志間泰治氏が角田町住社の堅穴住居跡出土品を標式として設定を試みた「住社式」(9)を基準としている。この型式の坏は、口縁部と体部との接続部分が外側において稜線を形成するのが特徴的といわれるが、顕著ではないけれども第一号墳出土土師器にもその特徴は認められ、同様の稜線は壺や鉢にも認められる。しかも、壺の底部は既に不安定ながら平底となっており、口縁部の直立した作りは須恵器との関連さえもわけるものがある。これらの特徴の共通性は、第一号墳出土の土師器を第四型式に比定することが妥当であることを示している。更に、これと近い特徴をもつと見ることのできる第一三号墳周堀出土の坏(第一六図)も、ほぼこの型式に属せしめて考えてよいのではないかと思う。この坏は、口縁が大きく外に開き、口頸部の特徴はむしろ次の第五型式に近いものといえるが、やはり

第四型式の中に入れて考えてよさそうである。

氏家氏の第四型式の美年代がどの頃に相当するものであるかは、これまで明言がないが、最近の古墳の年代観と対応せしめて考えれば、ほぼ六世紀頃に当てることできると思われる。即ち、仙台市南小泉の遠見塚古墳⁽¹⁰⁾は五世紀前半頃の築造が考えられ、その粘土槨直上から発見された土師器は南小泉集落遺跡出土の土師器と同類のものと見られるから、これらの土師器即ち第二型式の土師器はほぼ五世紀前半頃のものと思えることができる。これに次ぐ第三型式は、五世紀の後半に降るものであろうことは容易に推定できる。更に、今問題である第四型式はしばらくおいて、第五型式⁽¹¹⁾(栗圀式)の年代を見ると、その下限は八世紀の中葉にまで至っているようである。その上限はどの頃に設定できるかは確かでないが、七世紀の中に考えることは可能である。第四型式は、このように前後の型式の年代を考えるとほぼ六世紀頃の型式であることが認容されよう⁽¹¹⁾。

さて、以上のような両墳における諸特徴から考えて、この古墳の年代は次のように考えることができる。まず、内部構造が木棺や箱式石棺であり、横穴式石室でないことから六世紀前半より降るものとは考えられず、鉄鍔から見ると五世紀後半をさかのぼり得ないものと知られた。更に土師器は第四型式に属するものと見られるから、六世紀頃のものであり、第四型式の範囲においては五世紀後半までさかのぼらせることは難しいと思われる。このように見てくると、この両古墳の美年代はその上限を土師器の第四型式で限られ、下限を箱式石棺の盛行と関連して限定することができよう。すなわち、六世紀前半頃がこれら古墳の美年代と考定することができる。

(2) 鷹の巣古墳群における両古墳の意義

前述したように、我々の調査した二ツの古墳は六世紀前半頃に年代考定できるものとなつた。さすれば、鷹の巣古墳群における両古墳の位置はどのように考えられるものとなるか。既に、最初に述べた如く鷹の巣古墳群中でいまままでに内部構造の明らかになつていゝものはすべて横穴式石室を有するものであり、所謂古墳後期に属するものばかりであり、比較的年代の下降する群集墳と見られてきた。しかるに、今回調査された二ツの古墳は共に横穴式石室を有せず、明らかにそれ以前の年代のものといふことが知られたわけであり、この古墳群の発生時期が更にさかのぼつて考え得ることになつたのである。二ツの古墳は、少くとも今日知られる限りでは本古墳群の中では古く位置づけられるものであり、その検討を通して六世紀前半には古墳群がスタートしていることが確実となつた。

この調査された両墳の外にも、鷹の巣古墳群には比較的古い位置を与えられるものがある。特に、第一三号墳の近くにある第一二号墳は埴

輪を圍繞した全長七〇メートル、高さ約六メートルの前方後円墳であり、その埴輪の中には鶏（図版一二(3)）の頭部も発見されている。⁽¹²⁾

この第一二号墳は未調査であるので内部構造などの具体的なことはわかっていないが、第一三号墳との立地の関係等から見てそれより新しい年代を与えることはできないものであろう。その外、円筒埴輪をめぐらす古墳としては径二二メートルの第一八号墳、径二四メートルの第三七号墳の円墳があり、共に調査古墳と近い年代のものではないかと予測される。これらの古墳が本古墳群中では古く位置づけられるものであり、古墳群の初期を特色づけるものであろう。それらの年代は、調査された二つの古墳の年代とほぼ前後する頃のものであろう。

この古墳群では、その後横穴式石室が採用されて、数的にも多きを加えた。現在開口している石室から見てもその変遷はたどれそうであるが、更にその後には片倉氏が調査されたような終末期の横穴式石室と見られるものが存在する。そして、墳丘等は不明であるが蔵手刀を出土するような場合もあつて、古墳群の下限は八世紀にも及んでいることが知られている。それ故、この古墳群は六世紀前半から八世紀まで営造が続けられていたことになり、約二〇〇年以上にもわたつて造りつがれてきたものであつたと知られるのである。

鷹の巣古墳群は、数支群に分れて存在していることは既に述べておいた。その中、第一号墳の属した第I群は、片倉氏が調査された折には一一基からなり立つていた。一一基の中、現在では三基が存続しているのみで、他はすべて湮滅してしまつてゐる。内部構造の知られてゐるものは、第一・五・八・一〇・一一号の五基である。この中で我々の調査した第一号墳は礫を敷いて埋葬したものであり、この第I群では恐らく最古のものである。その他の四基は末期的横穴式石室を有し、墳丘も一〇メートル未満のものであつたらしく、年代的にも七・八世紀に下るものであろうと思う。もちろん、その四基の中にも第一〇号墳の如くやや胴張りのものもあるし、他のもののように胴の張らないものもある。内部構造が未発掘でわからないものは、現在残つてゐる第三・四・七号の三基があるが、この三基は第一号墳と他の内部構造の明らかでない四基の中間の墳丘規模を有するものであり、直径一〇―一四メートルを測つてゐる。その点で、末期的横穴式石室を有する古墳よりも内部構造も若干大きなものを持ち、年代的にもそれよりさかのぼつて考え得るものではなからうかと思われる。そう想定すれば、この第I群は、最初に第一号墳が営なまれ、その後第三・四・七の古墳が作られ、更に第五・八・一〇・一一等の古墳が続いたものと考えられ、この支群内において十分に変遷がたどれるものとなる。この支群における被葬者は、そのような点からみると系列的に連なる人々であり、これらの古墳は一族の長年月にわたる墳墓であつたとみられよう。同様の事は、第一三号墳の属した第II群でも当然考えられ、特に第II群では本古墳群中最大の前方後円墳である第一二号墳を中心としてゐることから、この白石盆地を背景とした最大の族長の墓であり、その族長の一族の古墳

群であつたといふことがいえよう。

む す び

以上、今回調査した第一号・第一三号兩墳の報告をし、若干の考察を加えてきた。鷹の巣古墳群では、なお具体的に知られていないものが多く、我々の調査した二ツの古墳はその一部でしかない。しかし、二ツの古墳の調査を通して新しく知られるようになったことも多い。

まず、最も大きな収獲は鷹の巣古墳群の初現の時期がこれまで考えられてきたよりも古く、六世紀の前半頃に置くことが妥当であることが明確となつたことである。このような初現の時期は、同様の群集墳である台町古墳群でもいえるものであろうし、箱式石棺を内部構造とする小円墳の存在するこの地域の古墳群に殆んど共通するものではないかと思われ、示唆するところが大きいものがある。第一三号墳では直葬された木棺と箱式石棺の関係が追葬関係として把握られ、箱式石棺が盛行する時期がある程度限定して考えられそうであることがわかつたし、これらが群集墳において占める位置もかなり明らかとなつた。第一号墳では周堀から土師器が良好に出土し、送葬後の儀礼の存在が推測できたし、更にその出土状態の検討を通して土師器と古墳の関係を具体的に示した。兩墳に周堀の存在することはかねて外觀上からも想定されていたが、それも発掘の結果によつて明らかとなつた。

これらの成果から考えると、白石盆地を背景として展開された古墳文化は、ほぼ六世紀前半頃から鷹の巣丘陵を墳墓の地とした族長達によつて代表されるような姿となつたものと思われ、その後約二〇〇年以上も古墳の营造が続けられていつたのである。このような古墳群の様相に對比して、一般庶民の生活は盆地から多数発見される土師器・須恵器に具体的に示されている。これらの庶民の力が古墳の造営にも大きく働いているのであり、この地に生活した祖先の営みが遺跡・遺物から具体的に知られることは極めて意義深いものがある。

〔注〕

- (1) 片倉信光「鷹の巣古墳見聞記」上代文化第四・五合併号昭和六年（国学院大学上代文化研究会）
- (2) 片倉信光「宮城県刈田郡白石町鷹ノ巣古墳群調査報告書」一二頁 昭和十六年八月（白石郷土研究会）
- (3) 板石については、東北大学理学部岩石学教室青木謙一郎博士、大貫仁博士の御教示を得た。それによれば、玄武岩と凝灰岩の板状斜

離せるものである由であつた。産出地は、極めて一般的であり、特に限定して考えることは困難との事であつた。

因みに、志間泰治氏の調査された角田市鱸沼古墳の箱式石棺の石材は、檜欅玄武岩と花崗岩であつたと報告されている。

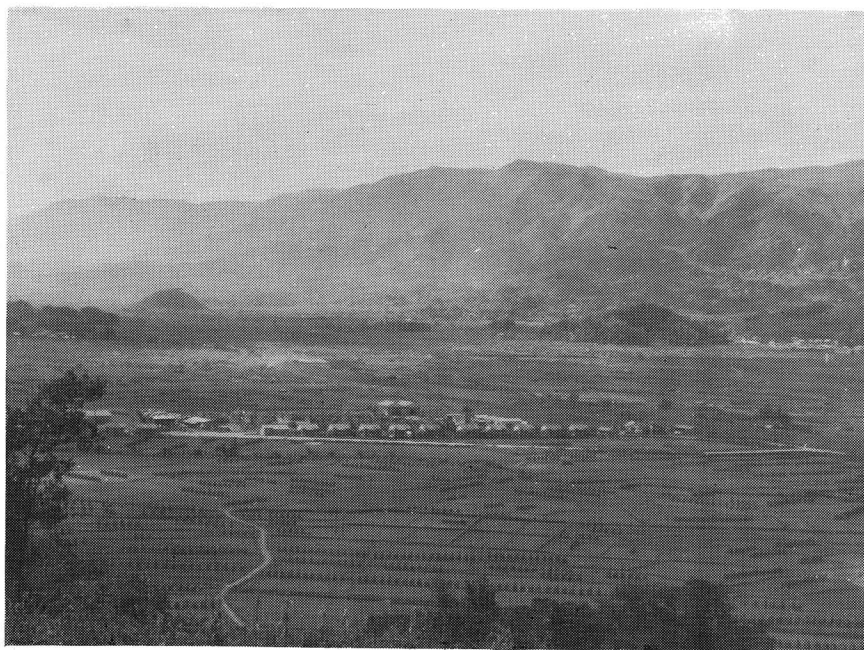
- (4) 志間泰治「宮城県伊具郡金山町台町古墳群調査概報」歴史第七集 昭和二十九年三月
同 「宮城県伊具郡丸森町金山字台町古墳群調査概報 第二集」 昭和三十年四月
同 「宮城県伊具郡丸森町金山台町古墳群調査概報 第三集」 東北考古学第二集 昭和三十六年十月
- (5) 平凡社「世界考古学大系 3」日本Ⅲ古墳時代四〇頁
- (6) 古墳文化時代の文化伝播は、かなり急速なものがあつたとしてもそれほど遅れるものではないという考えをもっている。東北地方においても、それは例外ではない。
- (7) 後藤守一「上古時代鉄鍬の年代研究」 人類学雑誌第五四卷第四号 昭和十四年
- (8) 氏家和典「東北土師器の形式分類とその編年」 歴史第一四集、昭和三十二年三月
- (9) 志間泰治「宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察」 考古学雑誌第四三卷第四号
- (10) 伊東信雄「遠見塚古墳」 宮城県文化財調査報告書 第一集
- (11) ここで述べている年代観はかつて発表されている年代観とは異なるものがあるが、過去のものにとらわれなくて、最近の知見を基として述べてみた。
- (12) この埴輪鶏は、現在片倉氏が保管せられている。その発見は最近のことである。

第Ⅰ群

第Ⅱ群



(1) 鷹の巣丘陵遠望（白石盆地斎川畔より）



(2) 白石盆地遠望（第13号墳より）



(1) 鷹の巣古墳群第Ⅰ群遠望（第13号墳より）

第12号墳



第13号墳



(2) 鷹の巣古墳群第Ⅱ群遠望（第Ⅰ群より）



(1) 第1号墳遠景（西より）



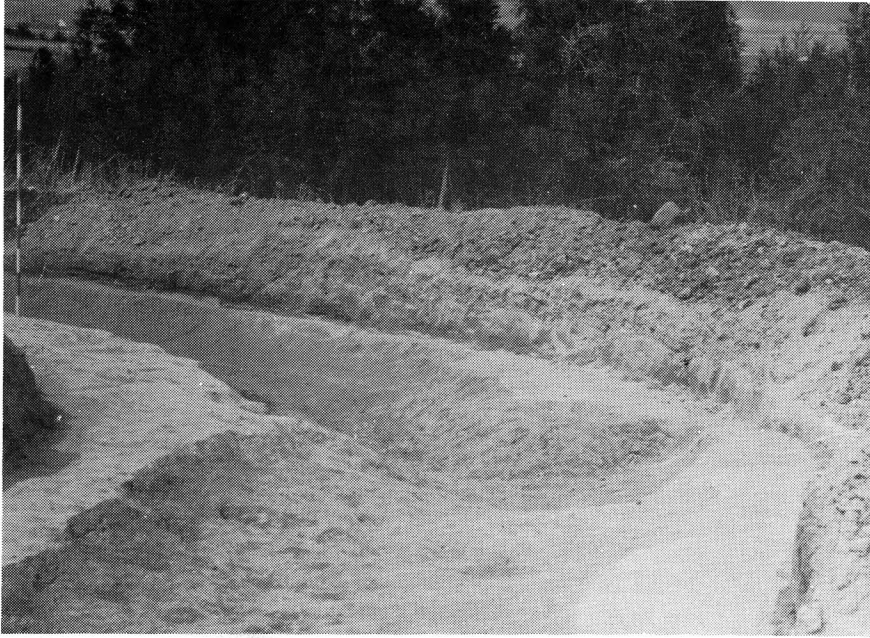
(2) 第1号墳東西トレンチ（東より）



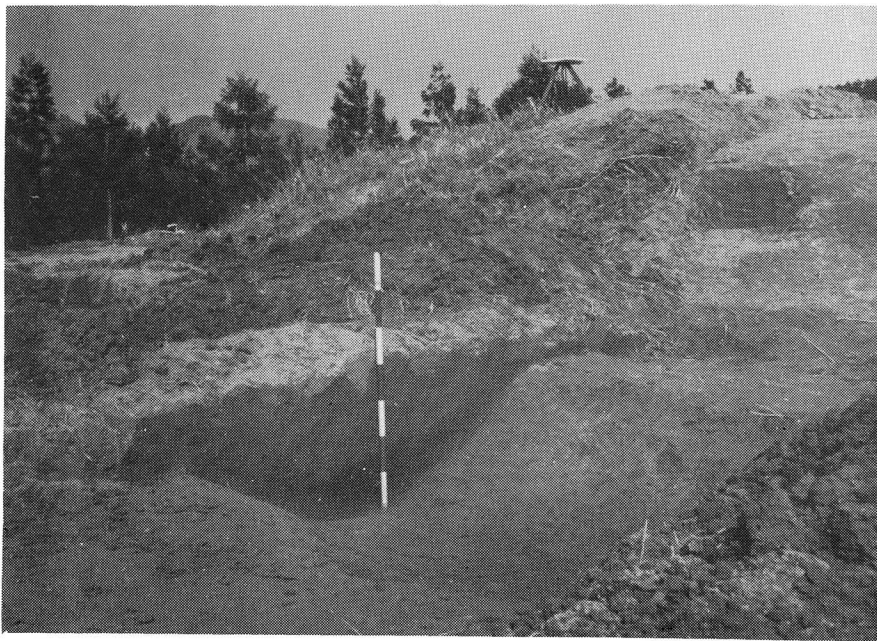
(1) 第 1 号墳礫群出土状态



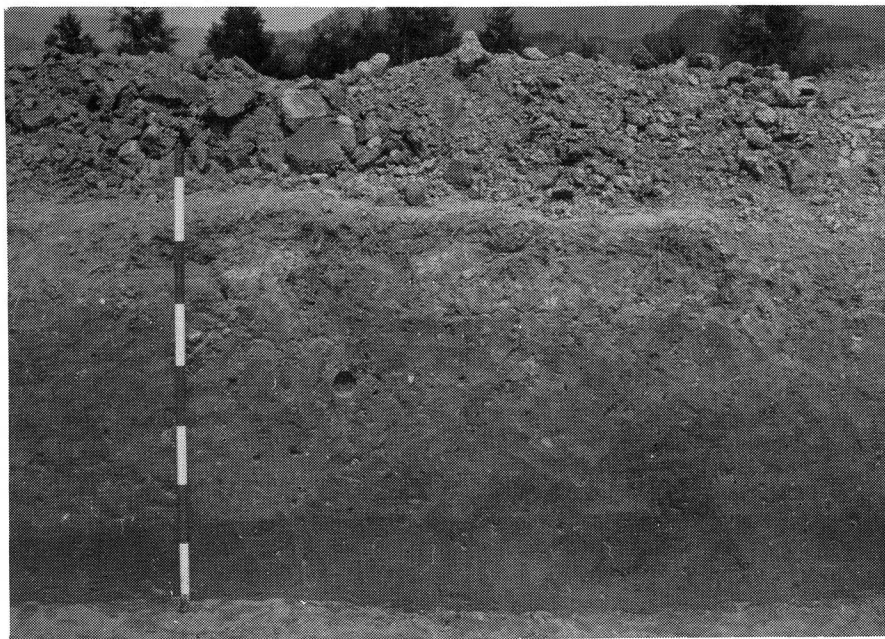
(2) 第 1 号墳北側周堀



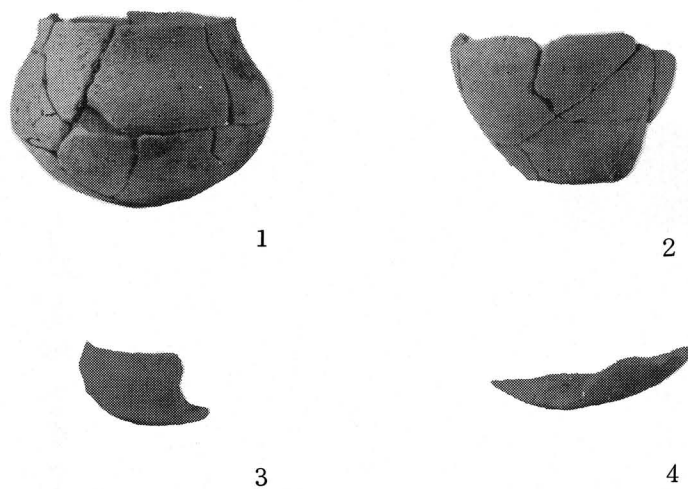
(1) 第1号墳東側周堀



(2) 第1号墳西側周堀断面



(1) 第1号墳墳丘積土状態



(2) 第1号墳周堀出土土師器



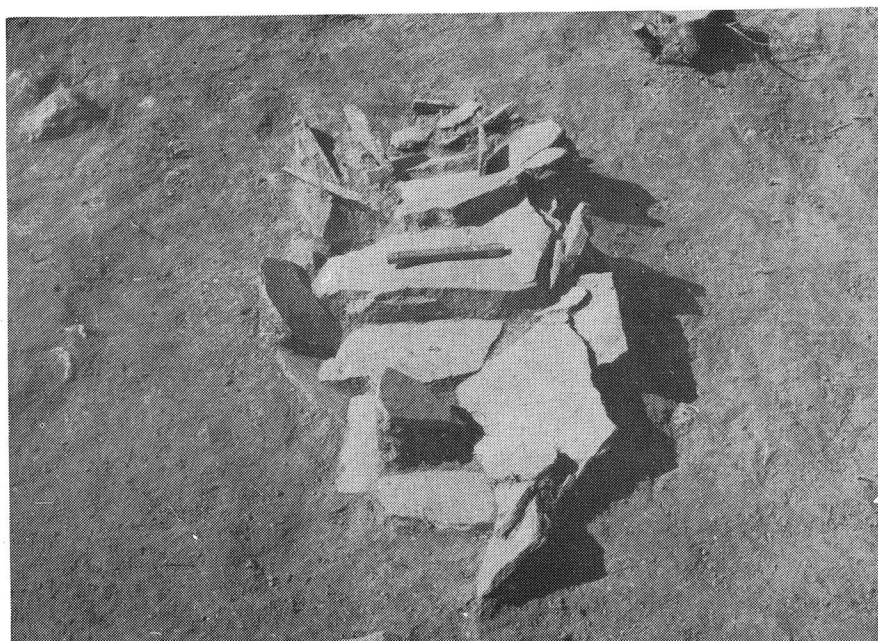
(1) 第13号墳近景（南より）



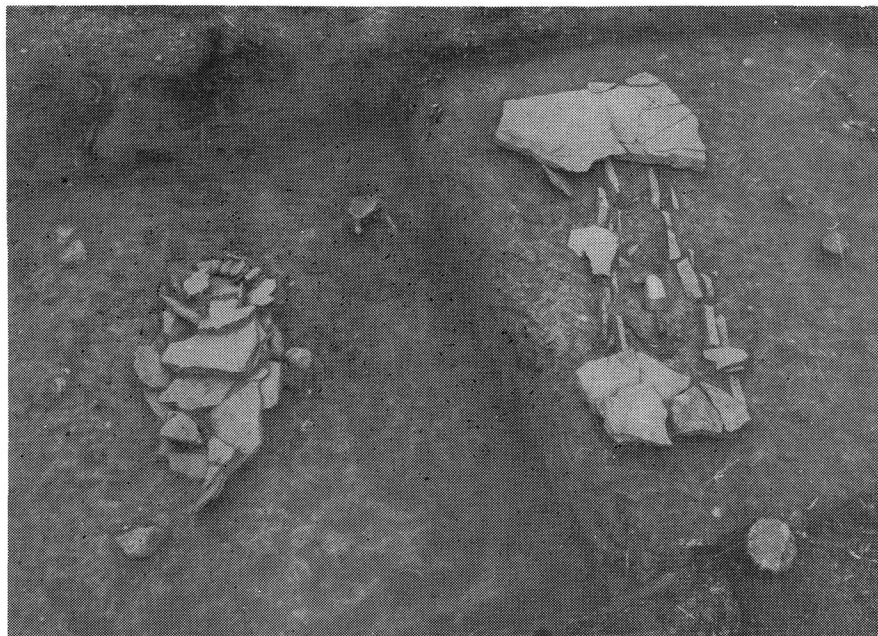
(2) 第13号墳近景（東より）



(1) 第13号墳南北トレンチ（北より）



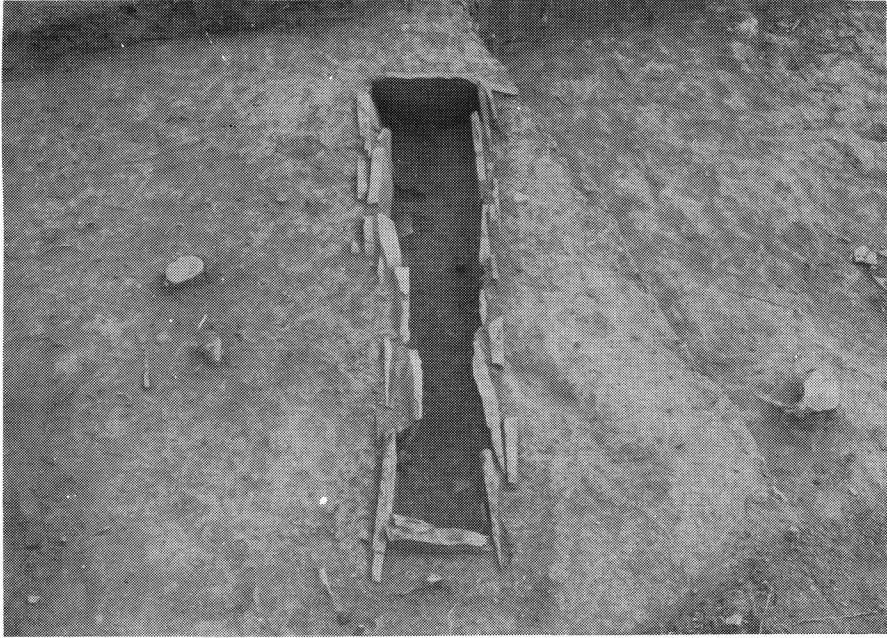
(2) 第13号墳墳頂の板石出土状態



(1) 第 13 号墳箱式石棺出土状態



(2) 第 13 号墳箱式石棺（蓋石除去後）



(1) 第 13 号墳箱式石棺 (棺内排土後)



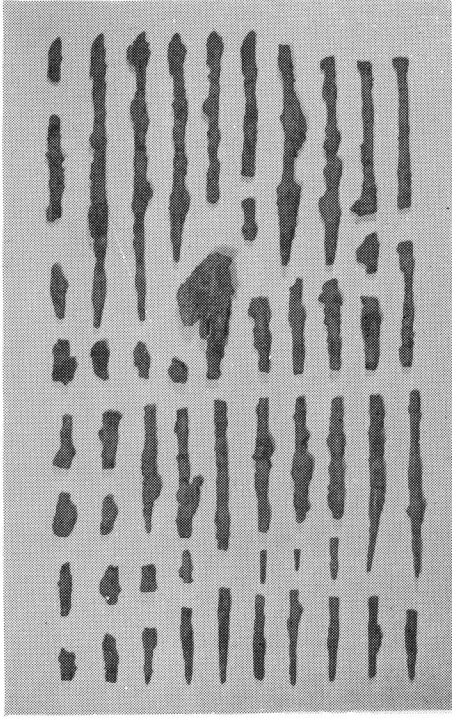
(2) 第 13 号墳内部主体遺物出土狀態



(1) 第 13 号墳東北側周堀（発掘前）



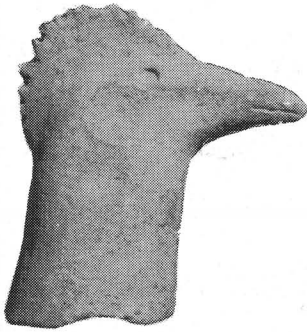
(2) 第 13 号墳東側周堀



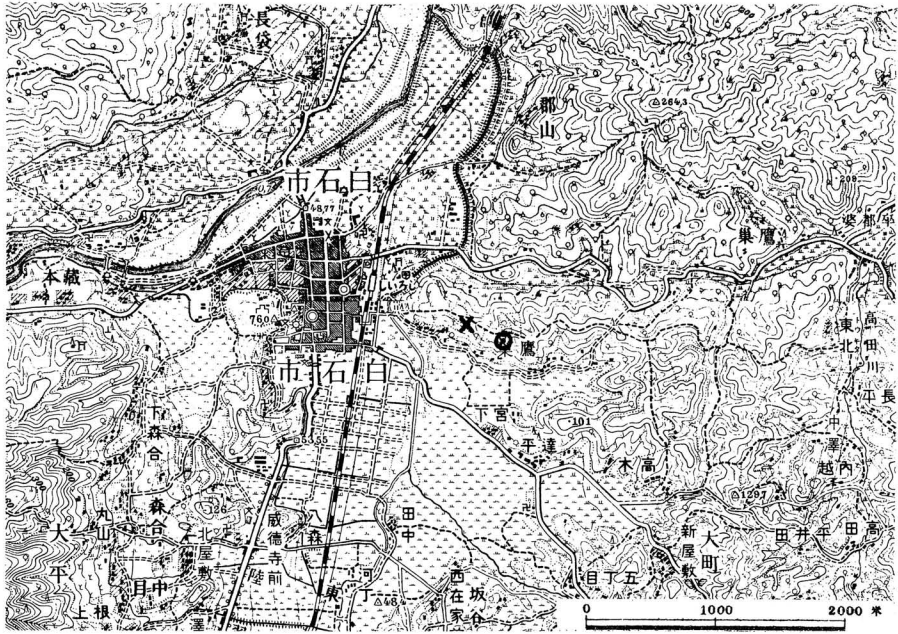
(2) 第13号墳出土鉄鏃



(1) 第13号墳出土
鉄直刀



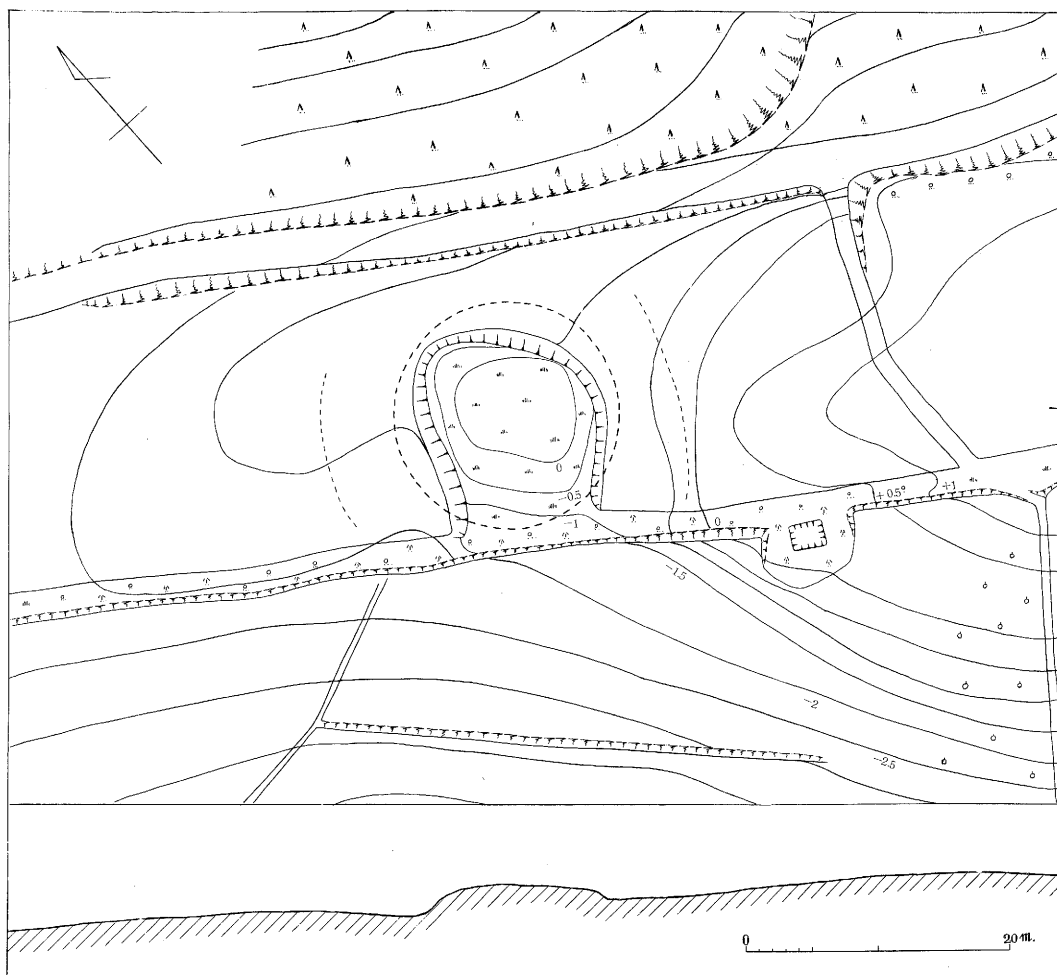
(3) 第12号墳出土
埴輪鶏



第1図 鷹の巣古墳群附近地形図
 (×第1号墳, ◎第13号墳)

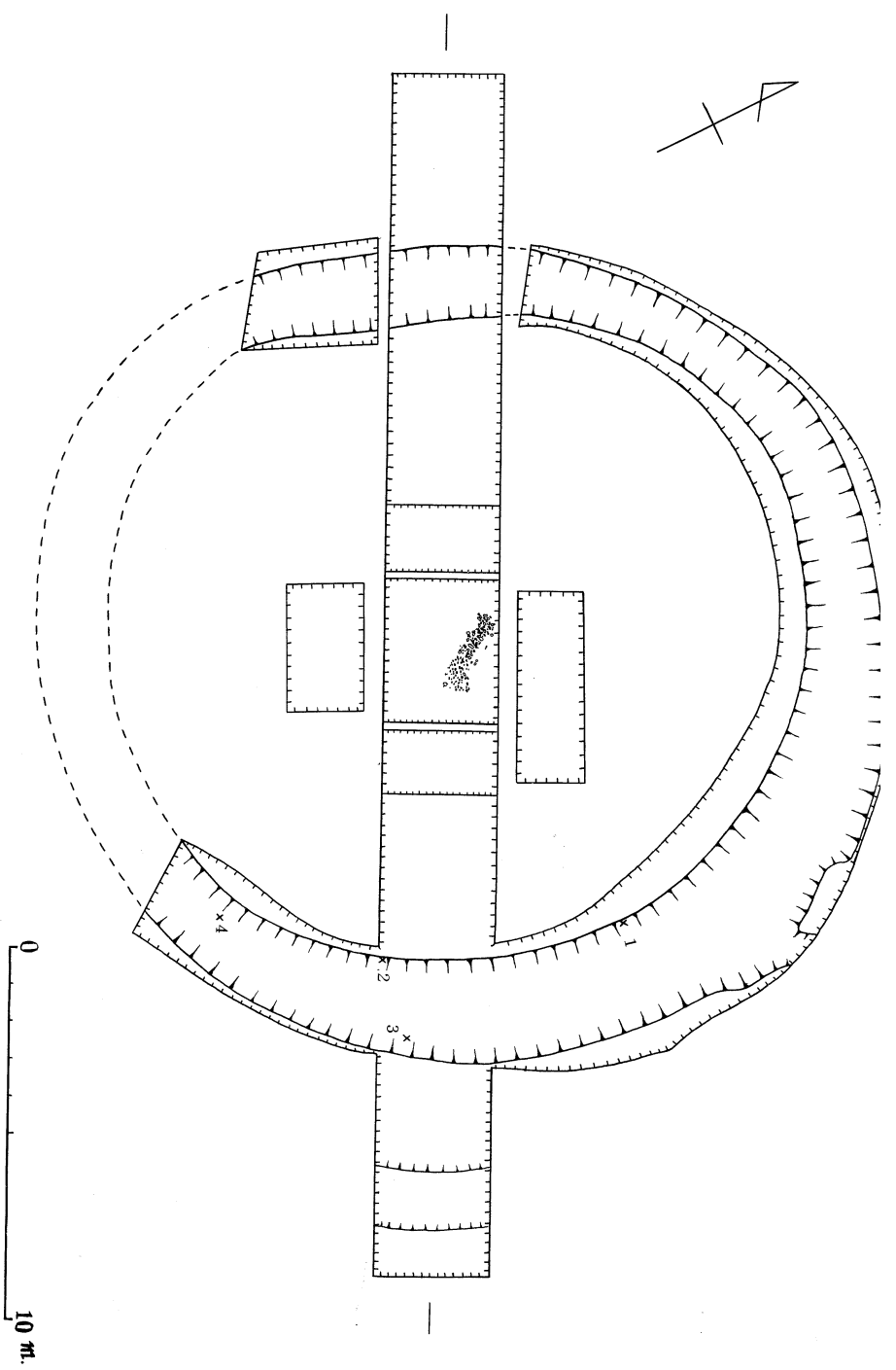
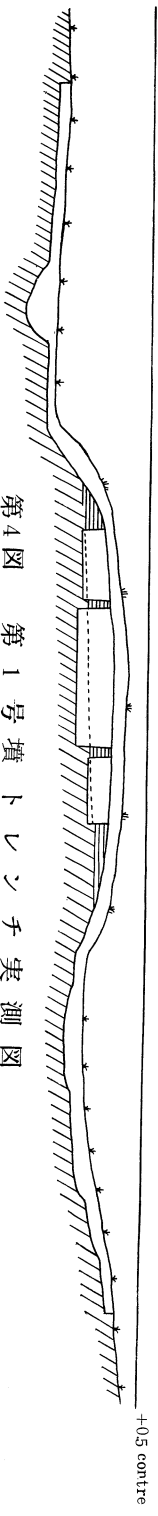


第2図 第1号墳発掘風景



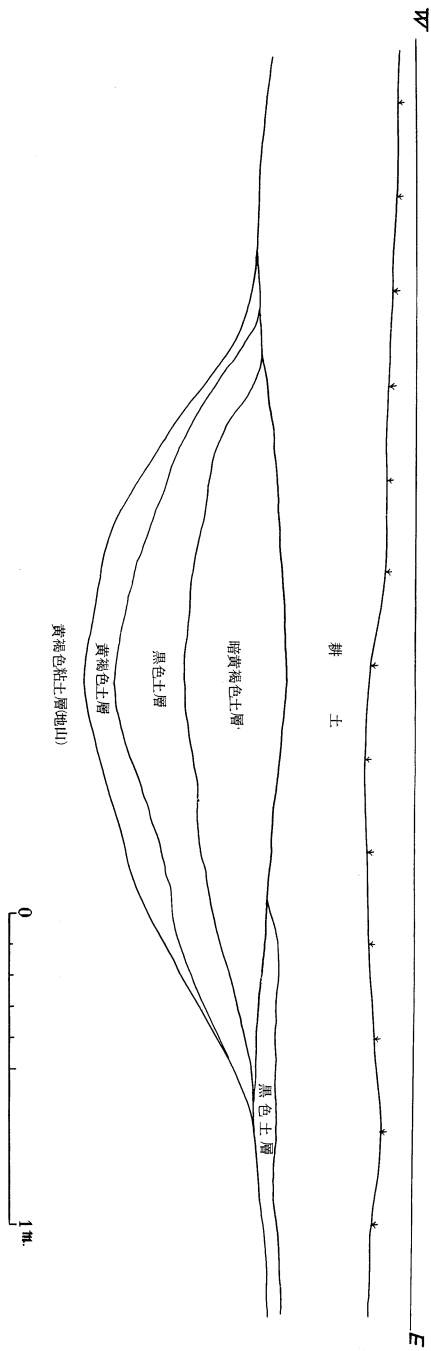
第3図 第1号墳附近地形実測図

第4図 第1号墳トレンチ実測図

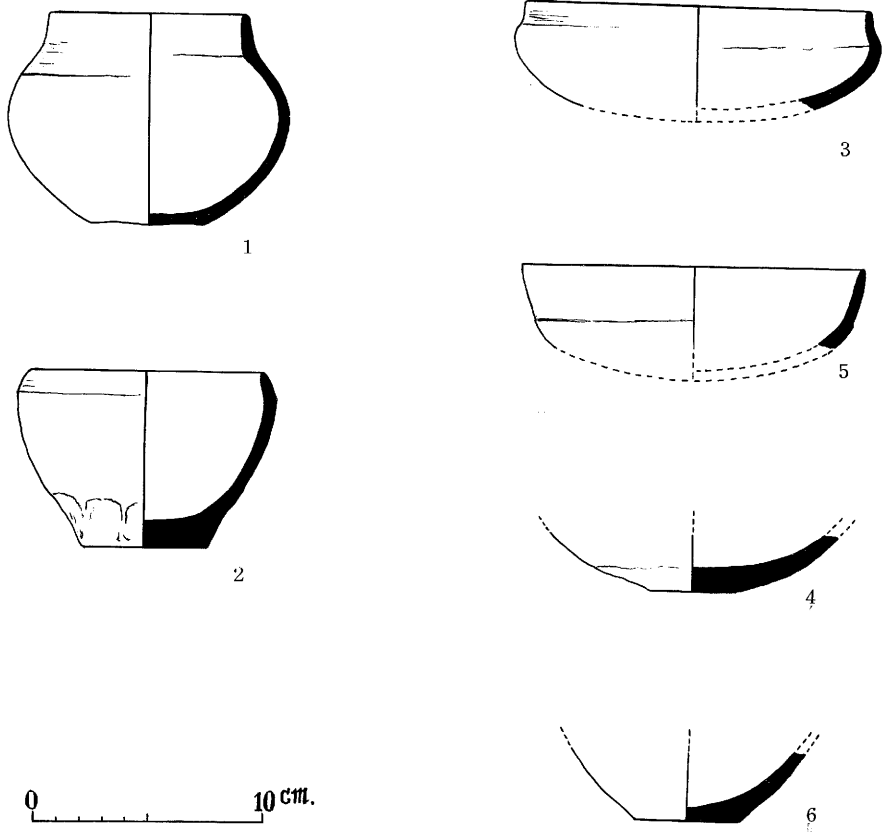




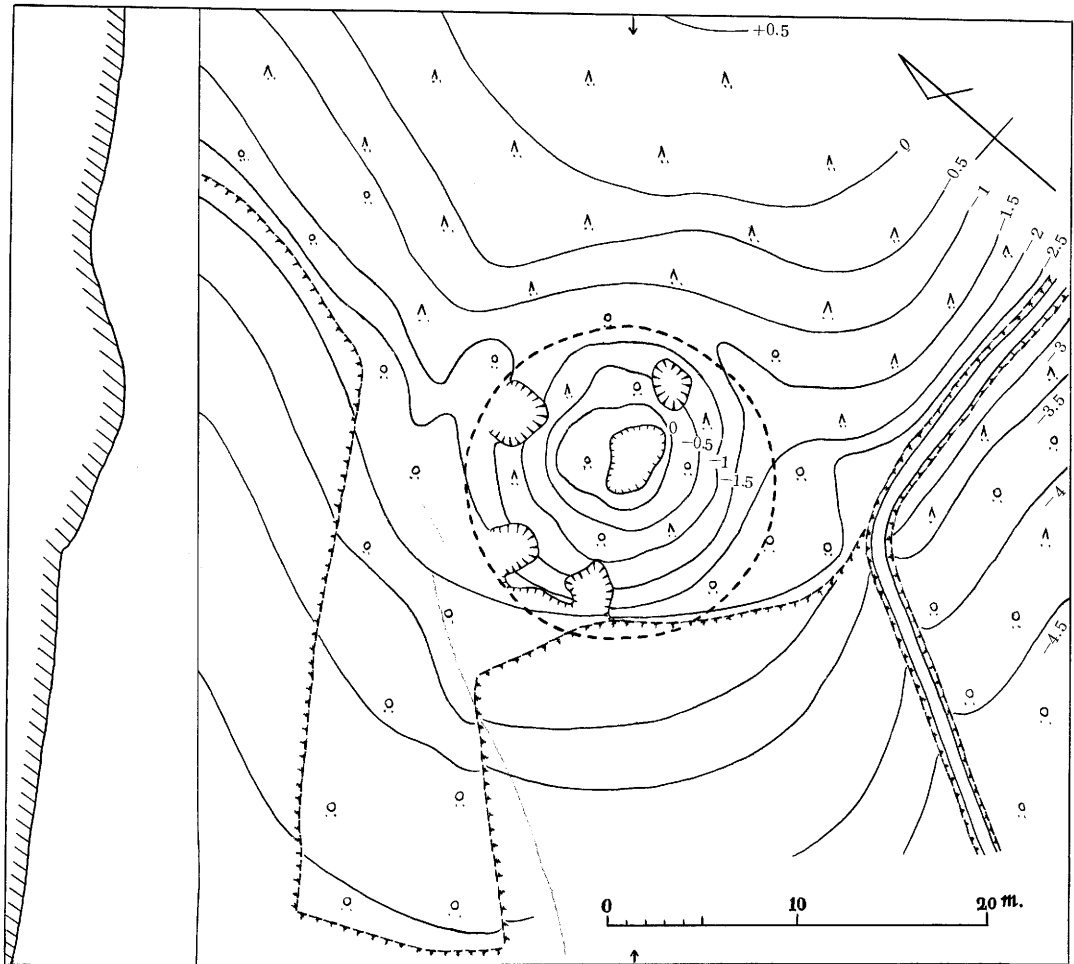
第5图 第1号坑群出土状态实测图



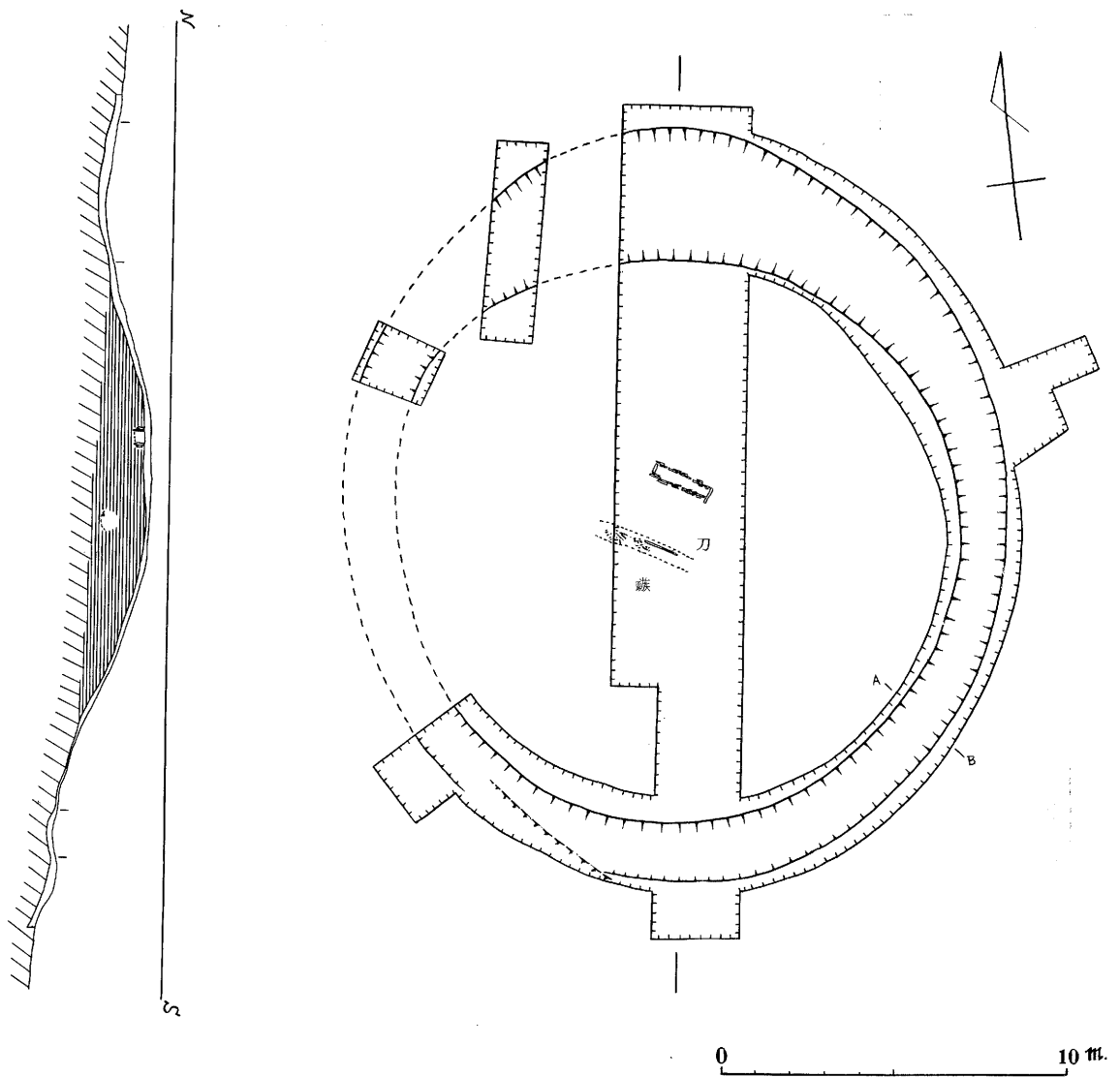
第6图 第1号墳 西侧周堀断面实测图



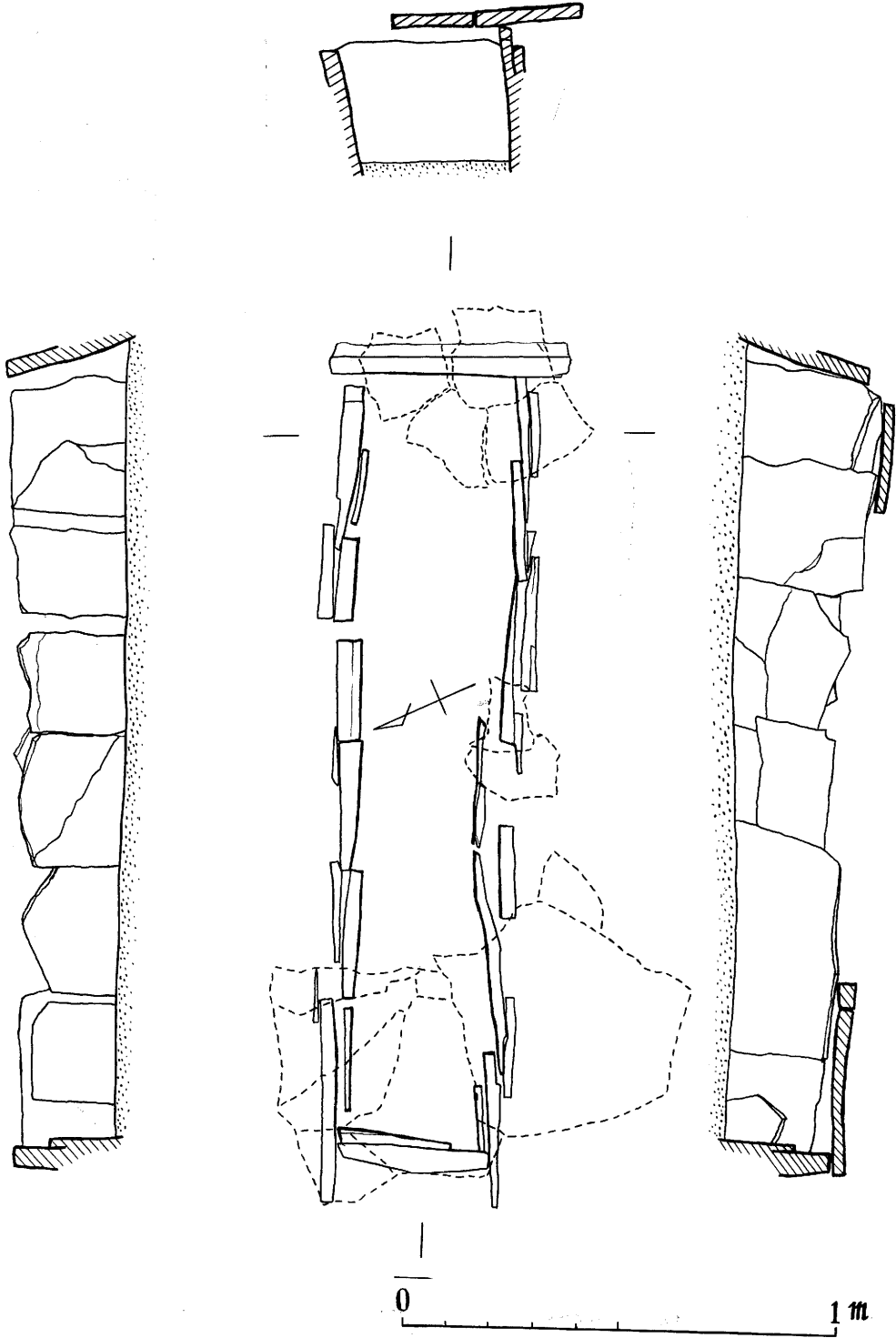
第7图 第1号墳 周堀出土土師器実測図



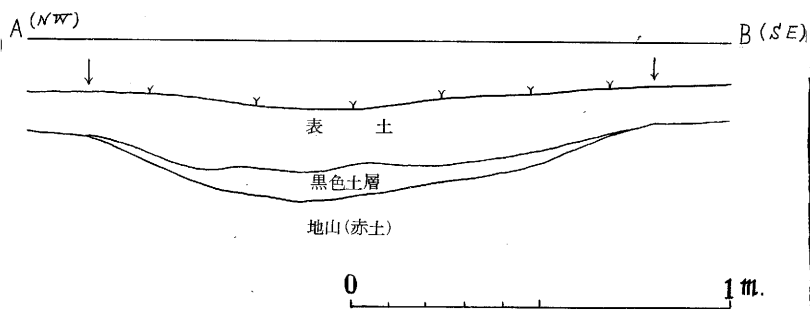
第8图 第13号墳 附近地形実測図



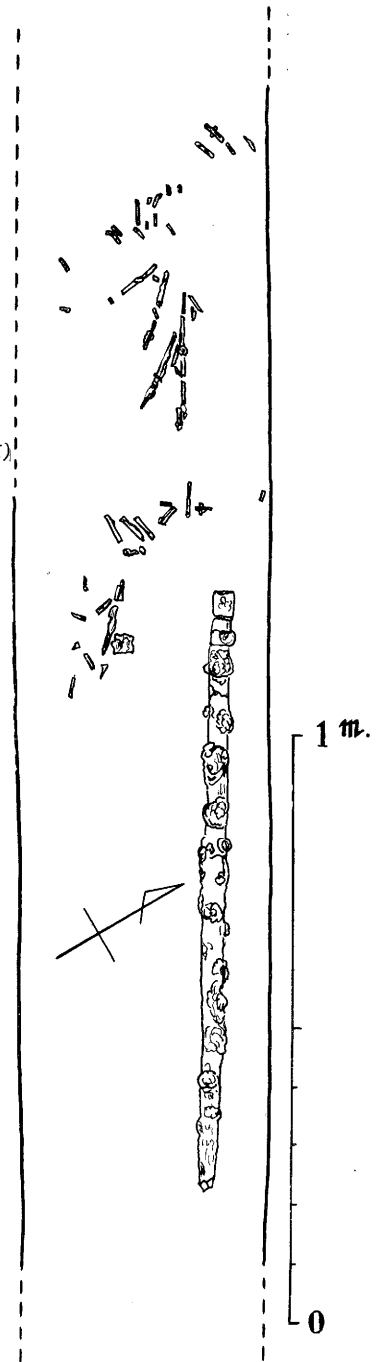
第9図 第13号墳トレンチ実測図



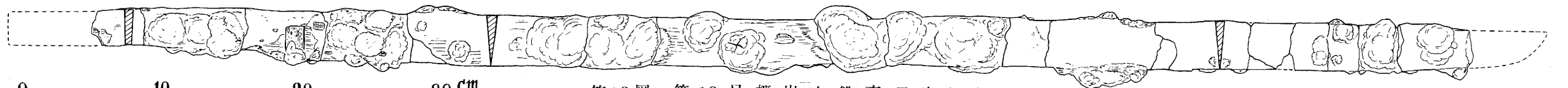
第10图 第13号墳箱式石棺実測图



第12圖 第13号墳 東南周堀断面実測図

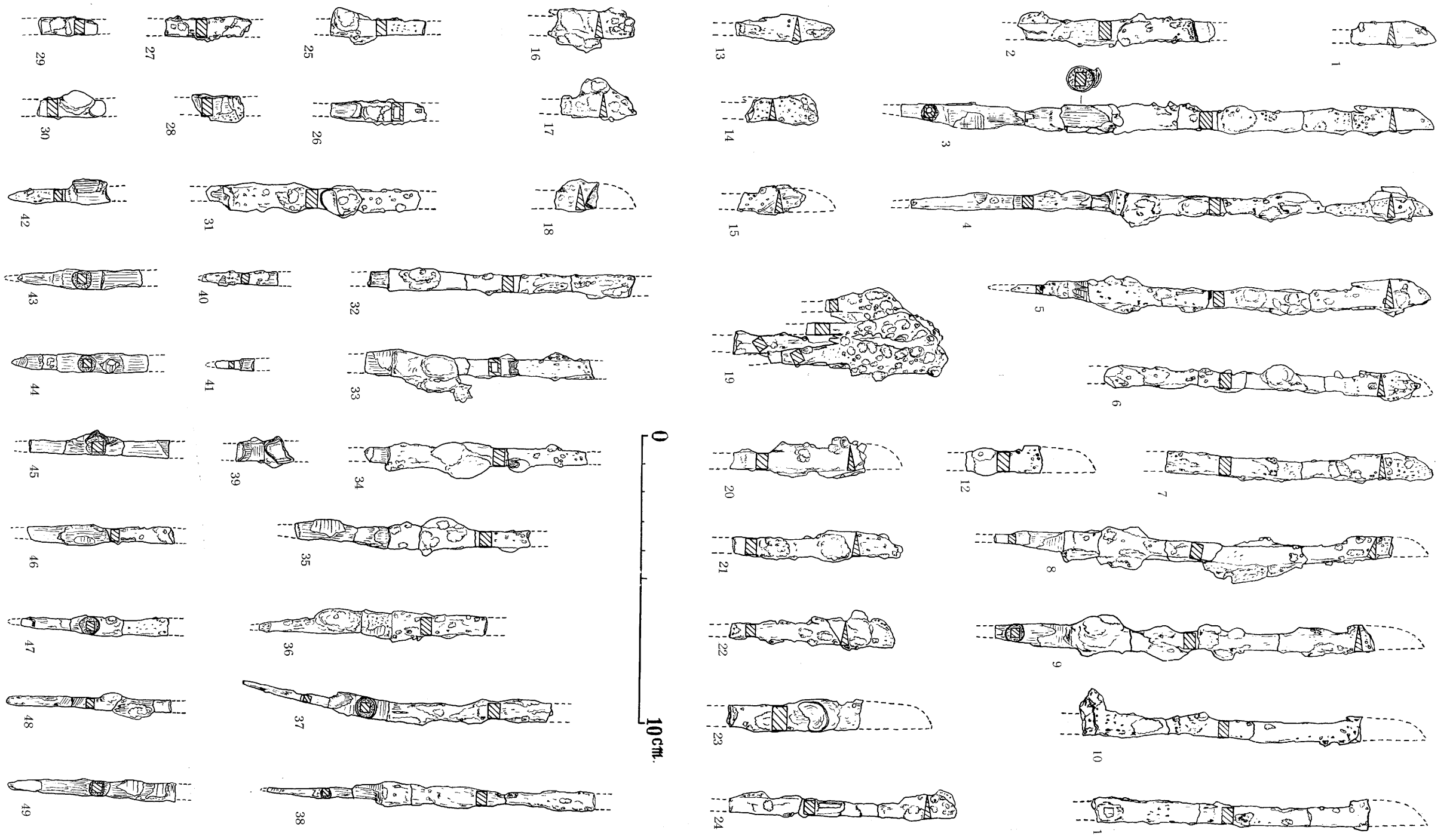


第11圖 第13号墳内部主体遺物出土状態実測図



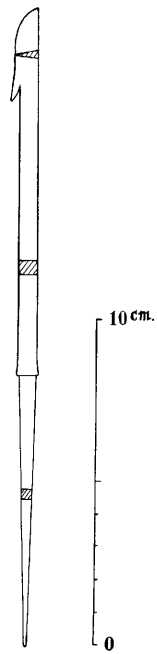
0 10 20 30 cm.

第13图 第13号墳出土鉄直刀実測図

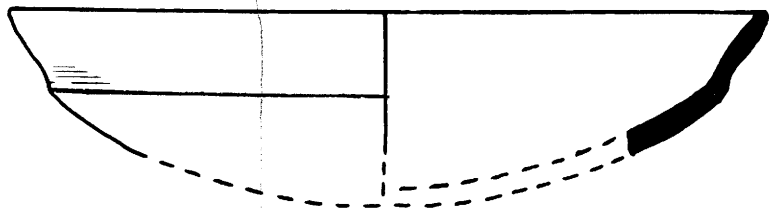


0 10 cm.

第14图 第13号墳出土鉄実測図



第15图 第13号墳出土鉄鏃復元図



第16图 第13号墳周堀出土土師杯実測図

